



TITLE:

<大會抄録>ヴェトナム李朝の地方 支配と権力基盤

AUTHOR(S):

桃木, 至朗

CITATION:

桃木, 至朗. <大會抄録>ヴェトナム李朝の地方支配と権力基盤. 東洋史研究 1985, 44(3): 549-549

ISSUE DATE:

1985-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154122>

RIGHT:

ヴェトナム李朝の地方支配と権力基盤

桃木至朗

十世紀に中國の支配下から獨立したヴェトナムの、最初の長期王朝たる李朝（一〇〇九—一二二五）は、中國式國家の外觀にもかかわらず、紅河デルタ内部にすら半獨立在地勢力が割據し、國家的治水事業などは行なわれていないことが指摘されている。筆者はこれまでこの指摘を踏まえて、次の陳朝（一二二五—一四〇〇）後期にはじめて科擧官僚層が登場し、紅河デルタの中央集權的、官僚制的、領域的な支配が實現に向かったことを主張してきたが、今回は、前記の狀況の中で李朝權力の在地勢力との關係はいかなるもので、李朝の支配體制は何を基盤としていたのかを、主に地方支配の觀點から考察する。

私見によれば、李朝が官僚制的に地方を直接支配していた記録はほとんどないが、紅河デルタから南方への通路に當る清化、北部山地の要衝富良などに王家の家産制的支配の形跡が見られ、中國への主要通路や北部山地の産金地帯の在地首長との關係には特別な關心が拂われている。一方當時のヴェトナムは中國への朝貢品の獲得を重視していたことが推測される。これらから考えて李朝王權は、農業の進歩に依據する側面ももちろんあるものの、なお土地の支配で

はなく交易ルートと交易（朝貢）品産地との支配を重要な基盤とするという東南アジア的色彩を色濃く有していたと考えられる。

唐代長安城と城南の開發

妹尾達彦

唐代の國都・長安の城内における都市構造の變化に對應しながら、その近郊の土地利用が進展してゆくことを、特に、南郊の開發に焦點を當てて論じるのが、當發表の目的である。

まず最初に、唐代後半期に、城内街東中北部にかけて官人居住地の形成されてゆく過程を、官人の品階別邸宅分布、邸宅規模・構造、邸宅管理方法等の變遷を踏えながら整理し、この様な街東官僚街の形成と併行して、長安城の東郊と南郊が、城外開發の一等地となつてゆくことを指摘する。次に、長安を核とする城市・交通・水利網を基盤とした、關中平野全體の土地開發の進行を概観した上で、關中開發の中心に位置する長安城とその周邊の立地上の特徴を、自然環境の面から考えてみる。

そして、長安城から、距離にして當時の片道一日交通圏に屬する、秦嶺北麓沿いの東郊や南郊、西郊の土地利用を、莊園、産業、名勝、水利施設、墓地などの分布から復原し、宋代に唐代の長安城南郊の遺跡を巡歴した張禮の『遊城南記』に基づき、特に唐代後半期における長安城南郊の開發狀況を明らかにしてゆきたい。